◇

【魚海宛・六月八日】

どうしたい、其後は――。また朝鮮の奥深くへ引込んだ樣だな。それもよからう――。

大阪にゐる明智五郎(即ち中濱)は、檢事に死刑を求刑され、判決は無期懲役だつたさうだ。たぶん控訴するだらうとのことだ。

僕の朝鮮滯在は、極く短い間だつたが、それでも、いろんな思ひ出が殘つてゐる。

道路のあらゆる裸木に懸けられた薪束のやうな朝鮮鴉の巢、岩と赤土との裸山。だらりと長い髯を垂れ、長い煙管で煙をふかしながら、一日中停車場で汽車見物をしてゐる田舍の人。漢江の冬の鯉釣り。土塀で圍まれた掘立小屋の魔窟のオンドル。破れ服の穴から素肌を覗かせながら、かち〳〵に凍つた嘆い漬物を嚙る鬼頭少年。

それ等を、よく夢の樣に追憶することがあるよ。それに過日、やはり此處にゐる朴烈の朝鮮服姿をチラと見たとき、緋、青、黄、紫の、綺麗な朝鮮の女の兒を眼に浮べて、ほゝ笑んだ。

◇

【望月福子宛・六月十日】

七日附の御手紙拜見。六日の夜に大きな月を見たとありましたが、僕の窓からはどうも旨く月が見えないんです。今年になつてから只一度、三月下旬に大きな月を二十分ばかり見ましたが、其後まだ一向に見ません。星も、この一二ケ月は少しも見ません。それに、近頃は七時十五分にはもう寢るんですもの。寢る時、外はまだ薄明るいやうです。

夜具伸べて窓を見やればうす靑く

暮れ行く空に白き雲あり

これは昨夜出來た歌です。

蓄音機を買つたんですつてね、好いですね。僕の窓へも、時々何處かの蓄音機が聞えますよ。赤い囚人は、近年、時々慰勞の蓄音機を聞かせて貰つたり、年三四回は活動寫眞(監獄巡回の)なんかも見る樣です。有難い御代になりましたよ。呵々。

わらじ蟲(望月桂)殿の神經衰弱、兼ヂフテリア全快の由、共に、お喜び申上げます。早速全快祝ひの句だと、頭をひねつたり鼻をつまんだりしたが、どうも出來ない。

祝全快

跳ねくるふ蚤も嬉しき且かな

これは本月の二日に無事退院した名古屋の伊串君に送つた句ですが、これを二番せんじで夫君に差上げます。即ち、甲のお客さまに出したお茶菓子の殘りを大切にしまつて置いて、乙のお客さまに出す格なんですね。世帶持ちの好いところを買つてやつて下さい。

◇

【中村しげ子宛・六月十二日】

鏡花の本二册、十日に屆いた。有難う。「番町夜講」は四五日前に宅下げした。讀んで見たまへ。あの中には、特にすぐれてゐるといふ程のものはなかつたが、しかし、僕には鏡花のものなら、どんなものでも理窟なしに嬉しく讀める。蟲が好くとでもいふのかな。「眉かくしの靈」と「火のいたづら」と「二三羽、十二三羽」の三つが、鏡花の特色が濃く出てゐると思つて讀んだ。

もし、思想だとか、哲學だとか、社會觀だとかの立場から見たなら、鏡花の作品ほど、くだらなく馬鹿々々しいものはなからう。が、美といふものの神秘を、人間のもつ情合の滴り、情熱の閃きの、その香氣と美と力とを、あれほど豐かに敎へてくれる作家は他に一人もない。その點に於いて我が鏡花は、實に古今獨歩だ。

日本の新しがりの文壇の中に、猶ほ鏡花が迎へられてゐるのは、その神秘的な筆力のみにあるやうだ。ドイツの神秘主義や象徵主義の匂ひを嗅いだバタ臭いのが、鏡花の唯美的な神秘な筆力に魅せられる。――そこに鏡花の現文壇的生命がある樣だ。即ち君が讀んで「晝間でも薄氣味惡い」と云つた「高野聖」の筆力が尊敬されてゐるのだ。が、鏡花の讀者の中には、現文壇の思潮や理論なんか糞喰へ!! 鏡花の、ふるひつきたいやうな小說が、貴樣なんかに解るかい!! といふ、熱狂的なのが澤山ゐるんだ。或る時、僕と隣り合せになつた强盜君がその一人だつた。僕の知り合ひになつた、或る料理屋の妻君がさうだつた。洲崎の女郎にも、その狂人が一人あつた。

僕に鏡花熱を吹き込んでくれた、泉州境の永尾といふ內なんぞは、夫婦は愚か、六十越した丞センのお婆さんまでが大の鏡花黨だつた。東京には、鏡花の熱狂者ばかりが集つて談話を交へる會合があつて、隨分いろんな階級の男女が集つたものだとも聞いてゐる。宮崎君の友人の竹森一則君なんかも、その會合に關係があつたとか聞いてゐる。――不思議な作者さ。

伊井、河合、秋月、喜多村(この男は大の鏡花黨だ)などの新派劇が盛んだつた頃、婦系圖はよく演つたものだ。大阪で、或る日僕もこの芝居を見に行つた。その時、僕の前に座つてゐた男が「何んだか辻妻の合はぬ芝居だナ。あの川瀨といふ男が、何んであんなに敵打だ敵打だなんて力むのか、さつぱり分らへんがナ」と云つたものだ。僕はその時すぐ「チェッ、南瓜嘆いゲッブをするない」と聞ゐよがしに呟いたものだ。ハハ、、、。

先達つて赤鬼(竹內仲之)君が『福田みたいな奴と命を取り代へつこするのは餘りに惜しい』と云つてくれたに對し、僕は「人間はね、場合によれば、見ず知らずの乞食のためにだつて命を捨てる樣な事もあるよ、君。いはんやだ……』と答へて置いた。

あの婦系圖の川瀨(?)の氣持が分る人なら、僕の赤鬼君への返事の氣持も分つてくれると思ふんだ。どうだい、御感想は――。

◇

【堺眞柄宛・六月十九日】

わざ〳〵面會に來て下すつたのに、會へなかつたのは殘念でした。御厚情深く御禮を言ひます。なにしろ此處の「立見場」は、一人つきりの一幕きりつてんですからな。それに幕開きが馬鹿に長いんですね。折角來て下さる人にも何んだか濟まない樣に思ひますよ。

「ほんとに久し振りなのに……」とありましたが、考へて見れば全く久し振りですね。南京蟲の血で汚れた壁を見つめながら、さて眞柄君の印象は、と考へて見ると、いよ〳〵僕が賣文社の玄關番と相成つた時、爲子夫人が布團を作つて下すつて、それを貰ひに行つたところ、保子(堀)さんの家の近所で賣つてゐた「二本ざし」といふ、おいしいものを買つて來てくれた人が貴女だつた。(先づ食ひもので思ひ出す所は、やはり貧乏人の悲しさですね、呵々。)これが、そもそもの初見參……。いや、さうぢやない、さうぢやない。堺さんの選擧の時、銀座から神保町までビラを撒いた時、あの方が先きだ。

あの時は白い大きなリボンをつけて、ひらり〳〵と軒先きを飛び歩きましたね。母さんと、女中さんと一緒に。――あの折り、鍋町の社の前で、確か皆んなで寫眞をとつた樣に記憶するが、その寫眞は殘つてゐませんかね？　それから……玉川の「鮎不狩」だ。高畠(素之)の明ちゃんに草花をとつてやつてゐましたね。明ちゃんは赤いリボンだつた。今、魔子ちゃんが丁度あの明ちゃんの年頃でせうね――。

それから……印象は大飛躍をして、赤瀾會設立當時、駿臺クラブになつてしまふ。度々いちご御しようばんに預つた樣だ。それから……最後に昨年の春時分だつたか、麹町のお宅でチラとお目に掛つた事がある。高瀨夫人は日本髪に結つて赤い手柄をかけて、姉さんかぶりをして、箒を持つてゐましたね。僕が久し振りで堺さんを訪ねた時――。

斯う印象を辿つて見ると、全く久し振りですな。駿臺クラブ以來は、餘り話したこともない樣ですね。しかし、その間に、一度お宅でお花をやつた覺えがある樣にも思ふんだが……。

ハハ、、、。いや、たわいもない事を書きましたね。が、近頃はひまな處へ人間が氣樂トンボと來てゐるんで、たえず、くだらないことや、たわいもない事を思ひ出しては、獨りで遊び獨りで笑つてゐますよ。

たわいなき憶ひに遊ぶたわいなき
我れを見出でて可愛ゆかりけり

これは四月に作つた腰折れですが、いまも相變らずこんな調子です。從つて、體も案外丈夫です。

「三人吉三」はいいな。しかし、やはり文里一重のくだりはやらないんでしような。「廓初買」ぢやなくて「巴白浪」なんでしような。羽左のお嬢として、和尙は、左團次ですかナ。吉右衞門ですかナ。左團次の方がいいがなァ――。

◇

【近藤憲二宛・六月二十九日】

昨日は御苦勞だつた。夜が明けたつていいから昨日中にやつてしまはう、古田君も大いに喋らう、といふ譯だつたのだが、裁判所の都合とかで延びて了つた。しかも、次回は八月十五日だつていふぢやないか、隨分飛んだものだ。それで言渡しが九月一日になつて、死刑されるのが九月十六日と來たら申分はないな。どうだ。呵々。

昨日は全然沈默を守つて無期の求刑(以上は出來ないと聞いてゐたから)に對して俺から死刑の要求をしてやらうとだけ考へてゐたのだ。が、向ふから死刑と出てくれたので「いよう、待つてました」となつた譯けだ。處で「あの男らしくない暗殺」の一言が一寸癪に觸つたから、ちよつぴり喋る事になつたのだが、何にしろまだ病熱があつたし、隨分不味かつたね、俺の理論は――。意味は通つたらうが、例の引き方が下手だつたよ。些か傍聽の諸君にも濟まなかつた樣な氣もする。しかしこの次ぎ古田君がウンとやつてくれる筈だから、それで埋め合せをして貰ふさ、ハッハ、、、。

◇

【松本親敏宛・六月三十日】

松田(十九二)君が今日中野を出るんだつてな、病監に入つてゐるとか聞いたが、體の樣子はどんな調子かしら。當分大切に養生さしてやつて欲しい。

大組合主義の、組合萬能主義なんか、俺だつて嫌だと思ふよ。が、一體、今の日本にそんな「大」組合てなものがどこにあるんだい。現在日本中にあるつたけの組合を一組合に纏めたところで(とても出來つこはなからうが)大した「大」でもなからうぜ。假空の心配なんかよせ!!

俺は、組合運動は最も大切な運動だと信ずる。それが本流にならねば駄目だと信ずる。が、「專心にやられる柄ぢやない」と自ら思ふなら、君は、君の柄にあふ運動をすればいいぢやないか。勞働組合以外にも、勿論、大切な運動は多いさ。

「單なる潔癖」なんか、俺は大嫌ひだ。「潔癖家」なら「潔癖家」らしく、それに徹底することだ。でなきゃあ、強い胃袋で、大食し、食ひこなして行くことだ。「單なる……」なんてのは大嫌ひだ。

◇

【近藤憲二宛・七月六日】

姫路のところは、福山町と福澤町との間違ひだつた。こんどは戻つて來やしないな。俺も、自分の母親や兄姉のゐる町名を忘れるんだから、天晴なもんだ。父の死んだ日もすつかり忘れちやつたが、そんなことを聞かさうものなら『それ・それ、そんな心懸けだからお上さまに

殺されるのや』なんて、親戚の人達は怒るに違ひない。天罰だな。呵々。

いま僕は、クロの自傳を讀み返してゐる。隨分久し振りだ。しかし、幾度讀んでも好い本だね。大杉が嘗つて『クロの自傳と相互扶助論ばかりは讀み返す度び毎に新しく感じ、何ものかを教へられる』と云つたが、全くだね。殊に僕には、相互扶助論よりも自傳の方が、よりその感じが深い。

僕は今シベリアの章を讀んでゐるが、一八六三年のポーランド革命を書いてゐる邊りは、實に好い教訓を含んでゐると思ふ。バルチザン戰法の意義がはつきりと現はされてゐる。僕は今度入獄してからトルストイの『戰爭と平和』を讀み、群衆と指導者との關係に就いて更に學ぶところがあつたが、いま自傳を讀み返してゐると、クロも『戰爭と平和』を引いて、その事を一言述べてゐるところがあつたから、僕は大いに快心の笑みを漏した。

『阪』(高倉輝著)は又、違つた意味で面白かつた。昨日の日曜一日、あれを讀んでしまつた。あの中の「猿」といふ章で、厨川白村を大いにやつつけてゐるね、痛快だつた。僕は禪君(これは、嘗て近藤が高倉輝を高倉禪と誤植して大失敗をやつたので、さう云つたのだ)のものを讀む度びにさう思ふんだが、よほど漱石の影響を受けてゐるやうに思はれるね。それは兎に角、「京都人」をあれほど赤裸裸に深刻に描き出した作者は、明治以後の文壇に一人もないからな。その點だけでも禪君は現文壇にもつと〳〵認められていい人だと信ずるね。

◇

【伊串英治宛・七月十日】

暑くなつたな。鶴舞公園の、あの泥臭い池で河童共が泳いでるだら?『キアモ、キアモ』つて叫びながら。

僕は大正七年に、『勞働新聞』の四號を密かに名古屋へ刷りに行つて、時間を消す爲めに、あの池で泳いだ事がある。大正四年の夏、名古屋で夕刊賣の親方をやつた時にも、よく泳ぎに行つたものだ。

――いま、監獄の蟬の聲を聞きながら、ふと、そんな事を思ひ出した。

「病後の靜養をしたいが金がなくて七轉八倒」か。七轉八倒……「炎天の土にのたうつみみず哉」つて譯けだな。

やつぱり、あの墓の中の、莚小屋で働いてゐるんだらうな、ビービーとむせび啼くやうな音をたてて、より糸をよりながら。

墓の中の工場! 全く、いい象徴だ。工場は即ち勞働者の墓場だからな。(前にも、こんな事を書いた樣にも思ふナ)

◇

【中村しげ子宛・七月十五日】

文藝家で、『秀才文壇』の編輯をしてゐた井上猛一君は、渡邊(政太郎)の爺さんの三角二階の集會へも時々顔を見せた人だつた。それが、當時まだ十位いだつたお節ちやんの未來のお婿さんであり、新内の家元たる鶴賀の息子さんだといふので、あの當時から一寸變つた肌合の人だつた。望月とはいつ頃から親しくなつたのか知らぬが、僕は、三角二階以來、終に今日まで會ふ機會がなかつた。ただ一度、猛さんのお母さんが加賀太夫と協調して富士松加賀八となり、猛さんもまた文壇を退いて富士松加賀路太夫となる少し前頃、一度吉原で、頭に手拭を載せて新内の流しをやつてゐる猛さんに出會ひ、驚異の眼を睜つた事があつた。それつきり、全く會はない。

あの猛さんが、こんど岡本文彌を名乘る樣になつたつて? 鶴賀から、富士松、岡本と、新内の家元めぐりをやつた譯けだな。ハツハ、、。猛さんは、いい聲だとは聞いてゐたが、僕は一度も聞いた事がないのだ。いつだつたか、三橋の寄席で獨演會をやると聞き、表まで行つたが、表看板に浪花節と新内とを調和させてやるとか何んとかあつたので、おつたまげて御免を蒙りやしたよ。その時も、五寸釘の寅吉、花井お梅、などいふ名題が出てゐたと記憶する。

新しいものを覗かうとする、近代人猛一君の氣持は僕にもよく分る。成功して欲しいものだと思ふ。が、それと同時に「近代的」なんてものの正體には化物が多く、眞當の意義はゼロなのが多いといふ事にも、よく注意して欲しいものだと思ふ。近代的落語家林家正藏君が、嘗つて倉田百三の「出家と其弟子」の本讀みを寄席で試みた事があつたが、あれなんかも、まあ失敗の方だつたな。「新内、講談、演說」を融合した新藝術――民衆的な――か。一度聞いて見たいものだな。食はず嫌ひで文句を云つても仕方がないから……死土産に、一日娑婆へ出して、いろんなものを見せたり聽かせたりせないものかなア、呵々。

先月、歌舞伎で、羽、左、吉、が默阿彌の「三人吉三巴白浪」をやつたつていふぢやないか。どうだ、知つてるか。俺の方がよく知つてゐるつて洒落ぢやないかな? いい劇だよ。「吉祥院」の場は、延島に言はせれば「ニヒリズム道德の極致」ださうだからなア――呵々。

――――――――――――

望月桂君

アフリカ沙漠の繪葉書ありがとう。しげ子君の好きな、ハリケンハツチ君でも活躍しさうな舞臺だて。沙漠は、確かに廣い大きな景色だナ。實際、こう、何か大きな廣い場所へ突立つて、命限りの聲で『馬鹿!!』と怒鳴つて見たい樣な氣持ちが時々起る事がある。盡天地是我。なんてな禪坊主の頭の手淫だけぢや、どうもの足らないて、呵々。

◇

【近藤憲二宛・七月二十日】

『倫理學』漸く讀み終つた。その動物の社會的生活から發生した、相互扶助、自己犧牲、正義、

等の社會本能的道德感情を高唱し、道德の起原及び其の歷史的發達を系統だてて論じ來つたのは、著者の自負する如く、眞に意義ある企てである。

が、ぐちつぽく言ふのではないが、階級鬪爭と倫理に就いて、謂ゆるマルクス學徒との相違を、クロが如何に論斷するかは、僕の最も興味を持つて知りたかつた點なのだ。しかし主として其の點に論及される筈であつた第二部、即ち『實在論的倫理學の基礎並に目的の解明』が、クロの肉體と共に、永久に埋沒されて了つたのは何んとしても殘念に思ふ。

先年、『社會主義研究』だつたか『赤旗』だつたかに、何處かの國のソシアリストが、クロの『倫理學』を評したのを譯載してあつたが、それは『要するにクロはお芽出度い人道主義者で、階級鬪爭の事實をはつきり見る事の出來ない盲人だ』といふ樣な文句だつたと記憶する。アナキストは階級鬪爭の事實を否定するとか、認めないとかいふ、ボル共の惡意的放言が、俺は常に癪に觸つてしかたがないのだ。

しかし、冷靜に顧みて見ると、謂ゆるアナキストと稱する人達の中には、その社會的創造性と道德力とを强調するの餘り、ともすれば勞働階級的の階級意識と憎惡的感情の意義を輕視しようとする傾向がないでもない。大戰後の、初めての各國アナキストの會合があつた時、階級鬪爭を認めるとか認めないとかいふ議論のあつたのに照しても、それが窺はれる。

『倫理學』の編纂者レーベデフは、或は此の傾向を持つた人かも知れないと思はれる節（序文にて）があるが、しかし、クロポトキンは斷じてそんな事はない、と僕は信ずる。

レーベデフの序文の中に『彼（クロ）は何等の個別的倫理學も承認しなかつた。倫理學は凡ての人に取つて同一でなければならないと彼は說いた。相互に對する階級とカストとに細分された近代社會には、決して單一の倫理學は存し得ないといふ事を指摘される毎に、彼は言ふのであつた。如何なるブルジョア的、若しくはプロレタリア的倫理學も、結局の所、共通の人種學的基礎の上に立つのであつて、該基礎は、時として階級的、又は集團的道德の上に極めて强い影響を及ぼすのである。』といふ處にあるが、此處なんかは、ともすれば讀む人をして誤解を生じさせ易い點だと思ふ。

即ち『何等の個別的倫理學も承認しなかつた』といふので、クロポトキンが一社會內に於ける異つた階級間の異つた意識、異つた思想感情を全然認めなかつたといふ樣にとられる恐れがあるのだ。

倫理學の基礎は共通の人種學的基礎——社會生活が齎した相互扶助、犧牲、正義、等の本能的感情——であるが、その道德の各時代に於ける進化樣相は、その時代の社會組織に依據するものである事を、もつとはつきりとレーベデフは述べて置かねばならなかつたのだと思ふ。

クロポトキンは、この著書の所々に於いて、その點はもつとはつきり言つてゐる。『凡ゆる社會の倫理學には、その社會生活の確立された形態を反映する』といふ句がそれだ。クロがスペンサーを論じてゐる處では、もつと充分にこの點を述べてゐる。また、階級鬪爭の事實と勞働階級の意義とを如何にクロが見てゐたかは、『パン略』と『革命の研究』を讀めば明白だ。

クロは斯う言つてゐる。『スペンサーが倫理學の中に、社會生活が形成する形態の論議をとり入れたのは全く正しい。人間の道德概念は、一定の時に、一定の地域に於いて社會生活がとつた形態に全く依據するものである。その基礎としてゐるものが、中央權力に對する完全な服從、即ち專制主義であるか、代議制政府であるか、自由都市及び村落共產體の契約であるか——凡てこれは人間の道德概念及び一定時代の道德說に反映されるのである。』

クロは、謂ゆる「唯物史觀說」を、最も正確に信ずる一人ぢやあるまいか。

クロは、この第一部『倫理學』の結論の處で斯う言つてゐる。

『事實は、生活樣式は一定の社會の發達の歷史によつて決定されるが、一方では、私がこれから證明しようと努める樣に、遙かに深い起原を有つてゐるのである。——即ち、凡ゆる社會動物に於けると同樣に、人間の衷に生理學的に發達する公正の意識の中に……』

この八人間の衷に生理學的に發達する公正の意識の中にある、遙かに深い道德の起原が、レーベデフの『何等の個別的倫理學も承認しなかつた』といふそのものなのだ。

しかし、道德樣相は進化する。その進化の動力は、とりもなほさず、進化してゆく經濟組織だ。社會組織だ。

◇

【古河三樹松宛・七月二十四日】

手紙を有難う。成る程、君の兄さん（古河力作）の當所で死刑になつたのは、思ひ起す、十五年前だナ。先達つては又、九州の諫早監獄にゐる武田九平君の弟の傳次郎君から手紙が來て「こんどの恩典には、こんどこそはと賴みにしながら、とうとう十五年間經つてしまつた。そしてこんども亦駄目だ!!」と云つて來た。九平君とあの事件との關係は、ほんの一寸した引つかかりださうだから、武田一家の人々が恩典を賴みにするのも無理ではなく、九平君本人も、澤山な表賞を貰つて模範囚人中の模範囚人として働いてゐるさうだのに、氣の毒な人達だ。

當獄に一人、あの當時から引續いてゐる古參部長がゐて、君の兄さんや、愚童和尙（內山愚堂）や忠雄（新村）君等の當時の樣を聞かせてくれた事があつたが、もう辭めてしまつたと見えて、こんどはその人の姿を見ない。

君は肺尖カタルだと宣告された時「今更ら未練のない生活をしなかつたのが恨めしかつた」さうだが、我々は全く、その心持を忘れない樣に心懸けてゐたいものだね。俳人芭蕉が死ぬ時、門人共から辭世の句を望まれて「これまでの自分の句は、一句々々皆な辭世である。昨日の句は今日の辭世だ」といふ樣なことを云つたさうだが、味のある言葉ぢやないか。昨日の句は今日の辭世——この態度で生活して行ければ、未練はない筈だネ。しかし、この未練のない、ど

つしりとした生き方をするといふ事は、何にもドエライ事をしなければならぬといふ譯ではない。それはむしろ、その人の生活態度、信念の上にある事だ。

僕は初め社會主義運動に身を投じて上京して來た頃「俺の樣な何んの能もない人間は、せめて演說會の下足番でもいいから、意義ある運動の上に砂粒ほどでも盡して死にたい」といふ樣な心持だつた。尤もその內に、だん〳〵自惚も募り、自負心も出て來たし、又ぐらついた醜い氣持にも幾度か襲はれたが、しかし最初の氣持の時に、下足番をやつて死んだところで、僕には「自分で出來るだけの生き方をしたのだ」といふ氣持で、やはり死ねたらうと思ふ。何故なら、他の人には下らないと思はれる仕事の上に、本人は全身的な意義を認めてゐたからだ。

◇

【中村しげ子宛・七月二十四日】

岡本文彌事井上猛一君に、僕からの手紙を引き寫して送るつて？　驚いたなア!!　たつたあれだけの感想ぢや、僕の言はんとする處だつてハツキリしてゐないしするから、猛さんだつて、ただ苦笑する他はあるまいぢやないか。僕の民衆藝術といふものに對する意見を、あの感想につけ足さなければ駄目さ。

昨日、初めて蟬の聲を聞いた。運動場への行き來の折りに見える病舍の庭には、いろんな綺麗な花が咲いてゐる。が、何んの花だか少しも知らない。兎にかく綺麗だ。芝の上には星草が咲いてゐる。運動場の塀の根元にはかたばみ草の花が黃金色に咲いてゐる。でつかい〳〵山蟻が活動してゐる。

昨日から午後一回、水で體を拭いてもいい事になつた。鐵窓には西日除けの簾が吊つてある。

◇

【古河三樹松宛・七月二十九日】

僕は勞働組合が墮落の傾向があるからといつて、その力なり、意義なりを輕視するのは大反對だ。それが墮落に向ふやうなら、猶更らその運動に向つて力を盡さなければならないと信ずる。

サンヂカリズムがあきたらない、といふのは、サンヂカリズムの或る點があきたらないと云ふのか、サンヂカリズムの總てがあきたらないと云ふのか。後者なら別に議論があるが、前者なら當然の事ぢやないか。少しもあきたらない點のない、完全な、何々ズムなんてなものがあるもんかい。あきたる點を取り入れて、あきたらない點を捨てつちまへ。マルキシズムから、サンヂカリズムから、アナキズムから、ギルドソシアリズムから、其他何々ズムから——。猶又、あき足るものは思考だけぢや駄目だ。思考といふ片輪者の中には、いつだつて充分にあき足るものなんかありやしないさ。あき足るものは自ら創造して行く他にないよ、實行と經驗の眞ん中から……。

◇

【中村しげ子宛・七月二十九日】

昨日古河君が面會に來てくれて、君が病氣で臥てゐることを知つた。そしてお見舞の歌でも贈らうかなと思つて小首をひねつてゐると、君からの手紙を受取つた。見ると「腹下し」とある。まあ〳〵おいたはしいと申上げていいのか、望みが叶つて御芽出度うと、お祝ひ申上げねばならんのかに、また小首を傾けた。この複雜なややこしいお見舞は、どうも歌ではいけぬ。俳句もそぐはない。そこで一つ、君の兄貴に川柳とは斯ういふ風に作るものだといふ事を敎へてやる親切氣を兼ねて、川柳と洒落れる事にした。御受納を願ひたい。

呈下痢女史

姬御前のあられもなくて腹下し

雷と夕立でさぞ御難澁う

夏痩せよなどとほゝ笑む横着さ

いよ〳〵吉祥寺の一週年が來たねえ。七月八月は、僕にとつては思ひ出の多い月だ。ホラ近といふ男と大井驛の附近でばつたり行會つた爲めに、「久さんは大井驛の鐵道線路の邊りをうろついて居たさうぢやないか。鐵道自殺なんかしてくれるなよ」なんて和田榮か誰れかの惡口が傳つたが、丁度去年の今日此頃だ。（蛇窪の離れ家へ行つた時の事）あゝ、僕はあの暑さを鼻先きで吹き飛ばして人違ひだと思はせるのに、どんなに苦心したことだらう。——しかし、井の頭の水泳は面白かつたな。武藏野の西瓜は旨まかつたな。呵々。

二三日前から蜩の聲を聞く樣になつた。蜩の聲を聞くと吉祥寺を思ひ出す。あのアメチヨコハウスの二階で聞いた杉の森の蜩。月夜の梟。——あの淋しい聲を聞きながら、僕は劃策に耽つたのだつた。そして「人生」といふ事を考へたのだつた。今年も亦、あの蜩が高らかに鳴いてゐよう。夜の深さを梟が啼いてゐよう。眞白い花も咲き亂れてゐよう。——。

何んだか、ちとセンチメンタルな調子になつたね。

韻々と雲の夕燒け移り行く眺めこのまま夢に入りたし

夢を喰ふ獏は知らずも我はいま寂寥を食む獸なるらし

◇

【川口慶助宛・八月三日】

僕の「參考書」に人を引きつける樣な感激のない事は、僕自身にもよく分つてゐる。要するに、あれは僕の落書だ。落書に感激なんかあらう筈がない。雲を眺めながら落書でも書いてゐる——それが今の僕にとつては一等好ましい態度なんだ。

大さん（古田大次郎）は全く珍らしい人格者だ。君は僕に對して畏怖心の樣な感じを抱いたといふが、僕は又、古田君に接してゐると、常にさういふ氣持ちを感じた。自分の濁つた血があの淸淨な血を畏れるんだな。中濱（鐵）の樣な奴でも、古田君には肅然として「古田さん貴

君は」と言はざるを得なかつたんだからな。僕は、尊敬はしたが、「よう、どうしたい」といふ風に親しめなかつた。

「嚴肅な感傷」より、「悲痛の感激、悲痛の快感」をよく味つて讀んでくれ。僕といふ人間は、あれが總てだ。人が、「和田久」とは、要するにどういふ男だと若し尋ねたら、あれを見せてくれ。僕は、あれつきりの人間なんだから――。

勞働組合の輕蔑を僕は輕蔑する。勞働組合の外に、えらがつて超然としてゐる樣なアナキズムなら「革命運動にとつて無意義だ。」もし「勞働運動」が勞働組合を輕蔑して徒らに嘲るのみなら、僕は「勞働運動」を輕蔑する。

◇

【近藤憲二宛・八月五日】

今日、別便封筒にて『後事賴み置く事ども』を細々十七枚ばかり書いて送つた。萬事よろしく御顧ひする。

今日借本定日で、「古事記讀本」といふのが來た。古びた本だ。なにげなく開けて見ると「警視廳鍛冶橋監獄」と印があつたので、アッと驚いた。鍛冶橋監獄――はからず講談中の人物に行き合つた樣な感がした。默阿彌のサンパツものも思ひ出されるぢやないか。霜夜鐘十字辻占、箱書付魚屋茶碗、香羽屋ッて云ひたい樣だ。今夜はきつと杜鵑がなくだらう――。

×

【近藤憲二宛・八月十二日】

△いま「死刑を直視しつつ」といふ參考書を書いてゐる。之は松谷（與二郎）辯護士と約束したものなので同氏に下げる。明日か、明後日には送れる豫定だ。題名はすばらしいが、內容は見事に貧弱なものだ。「こんどの裁判に對する感想」との話なので、それを書いてある。「何故死刑を望むか」も書いてある。「後事……」の中には、消極的な理由（死刑要求の）だけを多少匂はせて置いたが、此處にはもつと強く、積極的理由も持つてゐる事を書いて置いた。讀んで置いて呉れ。

△勞働組合に對する事は「最近殊に、組合に對する僕等の注意が、運動が、愈々力弱くなつてゐる傾向があるが、これはいけない。僕はそれを痛感してゐる」といふ君の手紙以上に、僕が何にを言ふ事があらう。勞働組合の運動がどんなに牛步的であらうと、時にはどんな迷行があらうと、我々は決して輕視したり、冷視したりしてはならないと思ふ。それと同時に、ともすれば蝸牛の樣に殼の中にのみ籠りたがる勞働組合員に對し、階級鬪爭の戰線が如何に廣いかを告げねばならぬ。全形勢に眼を配らさせなければならぬ。

△「失業問題が本當に眞劍に叫ばれなければならぬときである。」勞働者が當面してゐる事實を解剖して、何故に失業といふ悲慘事が起るかを、平易に、深刻に說くべきときである。くり返して、幾度でもくり返して!!

△君に、全集だとか子供のことだとかいふ大任を一人で背負せてしまはなければならなかつた。――その君の苦鬪を思ふと、濟まない、堪まらない氣持ちにもなる。だが、これより他に仕方がなかつたのだ。許してくれ。

△蟬が盛んに啼く。朝夕は蜩もなく。毎朝ほとんどくもつてゐる。土用の朝曇りといふんださうだね。麥飯の蟲が殖えた。

◇

【近藤憲二宛・八月十七日】

さて、一昨日は御苦勞樣だ。でも、思つたより早く濟んだねえ。布施（辰治）さんは大雄辯を振つたな。全く大雄辯だ。熱情もある。彼れ自ら熱情に醉ひ、雄辯に醉つてゐた。そこに多少の臭味がないでもなかつたが、兎に角、辯護士の辯論なるものは、あれがいゝのだと思ふ。しかし、僕は伯爵（山崎今朝彌）の辯論が大いに氣に入つた。一寸聞くと、水の中で屁を垂れる樣な事を言つてゐる樣だが、實に味がある。一寸した、くだらない文句の中に、無類の味がある。「辯護士には又辯護士の立場があつて……」とちよつと言葉を切つて「古田君は牢に三年も置けば、佛教信者になる人であつて」とやゝ論じたと思ふと、ひよいと言葉を落して「古田君はとにかく親兄弟の考へはまた違ふもので……」と、けろりと獨語じみた事を言ふあたり……「イヨウ、松助!!」と言つてやりたい樣だつた。

布施さんのは、左團次の丸橋忠彌だ。派手に、大向ふをウナラせるに足る。山崎さんの持ち味は、松助の家主長兵衞（髮結新三）である。「松魚ァ半分……」のうま味だ。

古田君が「僕の行動は主義そのものである。和田君はしらないが……」と一寸言つたね。僕は、古田君があれをウンとやつてくれるだらうと思つたのに、少し短かすぎた。それによつて、古田君と僕との立場の相違がハッキリされると思つたのだけれど――。尤もせんじつめれば、ただ重心點の問題だがな。「和田君は、わざとあゝ言つたのだらう――」なんて、ウガチすぎた誤解がないとも言へないから、そのうち、參考書として、此の問題を書いて見ようかとも思つてゐる。

大杉榮全集（3）見た。隨分いろんな寫眞が集つたナ、大いに嬉しい。殊に、牢屋で書いたウタの寫眞が面白かつた。年表は成るほど殖えたナ。しかし、僕等の第三回の公判まで書いてあるのには一寸驚いた。イヤお骨折、お骨折。

葬式の寫眞を見て思ひ出したが、此處でヒョックリ下鳥繁藏（大化會員、大杉の骨とり人足）に行き會つたよ。「イヤ、君は下鳥君だね。僕の顏を知つてるかい……何に、しらない……そうかねえ、僕は君にピストルで打たれて殺され損つた者なんだが……」といふと、「エッ！　ホホウ……」と言つて眼玉をクリ〳〵とさせおつた。僕はさつさと來てしまつた。脊骨かなんかで

來て居たらしい。

藤村の「春を待ちつつ」の中に、『その思想に於てはクロポトキンを取り、その人物に於てはバクニンを取るといつた人がある。思想の混濁は、そも〳〵こんなところに始まるものではなからうか。クロポトキンの人物からではなしにどうしてクロポトキンの思想が生れて來やう』といふのがある。それと人物を指してないが、誰れが讀んだつて、大杉の事を言つてゐるんだとすぐ分る。

ハハ……殼の中から僅かに角を振り動かせてゐる、でんでん蟲野郎が、キザな事を言やがるぢやないか。大杉は不思議な化け物だつたよ。彼はバクーニンの匂ひがあり、毛垢はクロポトキンの匂ひがあつたが、何處をつついても、泌み出す眞紅な血は、大杉の匂ひの他かはなかつたよ——」て、言つてやれ。でんでん蟲には、大杉の樣な丈夫な胃はあるまい。馬鹿ナ。

◇

【近藤憲二宛・八月十九日】

△この間の法廷で、伯爵が、『近藤君と和田君とは喧嘩をしてゐるといふ噂さは專らだつたので……』と言つたが、實際そんな噂さがあつたのかね、その當時に於て——。それこそ、ほんとに『呵々』だ。

△口の端へ、小さな「くさ」が出來た。子供の時分に口の端へおできが出來ると『親に口答へするよつてや』と、よく言はれたものだが、監獄では、法廷で生意氣な口を利いたりすると、斯うなるんぢやなからうか？　鶴亀〳〵。

△公判後のお別れの時に、僕は古田君に『もう一度會へるんだなァ』と言つた。古田君は『もう廿五日だねえ』とニコニコした。倉知君は、じろつと二人を眺めた。新谷君は、『腹が減つた、腹が減つた』と言ひつづけてゐた。

△自動車から眺めると、市ヶ谷邊は、皆な祭だつた。祭浴衣や、團扇や、手拭や、甘酒賣りなどを眺めてゐると、其の邊に村木（源次郎）が交つてゐさうな氣がして仕方がなかつた。

◇

【堺利彦宛・八月十九日】

十五日の公判には、一家がお揃ひで來て頂いて、有難う。久し振りでお目に掛つて嬉しかつたです。

成るほど頭は少し生え戻りましたね。でも、……仕方のないもので、冬枯の芒ですな。呵々。しかし、爲子夫人は、少しも昔と變りませんね。

先達つて讀んだ、玄耳庵支那叢書『興亡』の中の、徽宗帝最後の場面の處に、

『この地方（均州）は、死人があれば必ず屍を火で焚き、半燒きになつた頃、定りの石坑の中へ投げ込んで置く。そして置いて、その穴の中の水で燈油を製する。』

といふ事が書いてありました。これを讀んでフト思ひ出したのは、先年歐洲戰爭の最中に、獨逸軍が屍體から油をとるといふ事が日本の思想界に憤慨を起させて、「惡魔の所業だ!!」『人道の敵だ!!」と、やかましく論ぜられたことです。そして貴君と高畠素之君とは、それ等の人々のエセ人道主義を嘲笑つて「流石に獨逸だ!!　徹底してゐて面白い。戰爭で生きた人間を平氣で殺す人道主義者が、死體から油をとるのを惡魔といふんだから滑稽だ!!」と大いに皮肉られた、あの事をです。

僕もあの當時、貴君の議論を讀んで、實に痛快に感じました。エセ人道主義者の面皮をはがれたのが、何より嬉しかつたのです。しかし「人間の屍から油をとるのはいゝ事である」といふ唯物論的確信は、あやふやだつたのです。あの時、僕は賣文社の二階で山川（均）さんの意見を聞いて見たんですが、山川さんは「僕は、堺、高畠兩君の意見とは少しく違ふ」といつて、苦笑するだけで、どう違ふかは說いてくれなかつたのです。

處で、こんどこの本を讀みながら僕のフト感じた事は「支那人といふ奴は、隨分慘酷なことを平氣でやるもんだナー」といふにあつたのです。そして、それから聯想して獨逸人の行爲に思ひ至つた時、やつぱり慘酷だといふ感を强くせられたのです。だが、理性は、それを決して惡いことだとは考へないのです。けれども、その理性に背くセンチメンタルな氣持があつて「慘酷だ!!」と叫ぶんです。そして、さうした慘酷な行爲は、しらずしらず、人間のもつてゐる優しい氣持、愛他的感情を失はさせる。それが社會的に惡い結果をもつ……といふ風にも、又考へられて來るのです。屠牛者や、犬殺しや、刑事や、×吏などの、その職業から受ける精神的惡影響などといふことも、其處に考へられてくるのです。

（牢屋が齎らすセンチメンタルでせうか？）

◇

【望月福子宛・八月二十一日】

十五日附の小諸（信州）からのお手紙嬉しく拜見しました。殊に、いろ〳〵のやさしい秋草を有難う。信濃は、もう萩さへ咲いてゐるんですね。朝夕、蜩が鳴き出したのも無理はないやと、今更らしく空を眺めました。成る程、空の底は、もう何處となく秋が澄んでゐます。澄んだ朝空には、薄く月が殘つて（映つてといふのが本當だらうが）ゐます。

早速、小諸へ返事をと思ひましたが、御兩親の家へ監獄からの手紙はどうかと思つて差し控へました。何日頃歸京されるか知りませんが、その後に見て頂くがいゝと思つて、この手紙もやはり千駄木へ出します。あのお手紙で、こんな句が出來ました。

文とけば信濃の秋のこぼれけり

啼け歌へ蟬よ信濃は既に秋

心から信濃の露に濡らるるか

まことと君は信濃が原の秋女
この露の音信來とてか朝の月
公ちやんの遊び戯ろ麥を思ひつつ
萩の花の露がこぼるる頼つべかな
近よれば逃ぐる蜻蛉を叱りけり

僕の體は、至つて丈夫です、御安神下さい。病監の前の處に、おいらん草が綺麗に咲いてゐます。

（送つて下すつた花のうち、萩と、女郎花と、コスモスとは分りましたが、あとの三種は知りません。何んといふ花ですか？）

◇

【和田榮太郎宛・八月二十六日】

……（前略）……彼等は、その漫罵と空氣焔とだけは中々巧みだ。しかし、組合を如何に育て、如何に組織するかに就いての、何等の積極的意見を持つてゐない。組合運動が下らなければ、組合運動を止してどんな運動をすればいゝんだと訊くと、少しもハツキリしたものを有つてゐない。又、そのハツキリしないものをハツキリさすべく努力を拂はうとさへしないやうだ。ただ、俺は俺だといふやうなスチルネルのローズ振りを發揮したり、セキリオフの口眞似をして深刻さうな面つきをして見せる位のものだ。處で、僕は斯う思ふ。かういふ人達が多く出來るといふことは、一つはその人の性格にも因るだらうが、しかし、重大な原因は我々の運動の間に、思想教育といふことを輕視する傾きが濃厚だからではあるまいか。

即ち、單に勞働者としての反抗的感情があるばかりでは不十分であつて、ハツキリと階級鬪爭の意義を摑むといふことが最も大切な事だと思ふ。經濟組織の進化と、社會形態の諸相との關係や、その最も有力なる鬪爭機關としての勞働組合の戰ひが、如何に多くの犧牲――しかも闇々裡の惨めな――を拂はねばならぬかといふ事や、從つて、如何に多くの苦惱と共に戰はねばならぬかといふ事を、充分に知らねばならぬ。それを明確に認識しないものには、強い忍耐と、不斷の戰ひに對する根強さがない。直ぐ、お先き眞つ暗になつて、自暴的になる。バーの安酒に醉つぱらつて、冷嘲に快をやり、線香花火のやうな氣焔を吐いて、以て自分で自分を欺いて行く樣になる。

さうぢやあるまいか。

……（中略）……クロポトキンは言つた。

『革命とは多くの人間を虐殺し、ギロチンにかける事にあるんぢやない』『フランス革命は、あれほど大膽に行爲しながら、思想的には實に臆病だつた。だから失敗した』と。

そして、マルクスは、

『あの時、勞働者が思想的に臆病だつたのは、勞働者をして新らしき建設的方法を意識せしむるに至るほど、まだ、資本主義經濟組織が發達してゐなかつたからだ。プロとブルとの革命運動が、同時に來たのではあつたが、まだブルの革命に終るべき經濟狀態にしか達してゐかなつた』――と。

カフエー革命家や乞食革命家やは、定めし『その時機』には目覺しい『革命的運動』を演じる事だらう。野次馬的、泥醉的壯勇を振つて――。そして、思想的には、建設的には、全然お先き眞闇で――。噫々!!

『思想に大膽なれ！』といふ事は、過激な文句を馬が泡を吹き出す樣に、噴き出す事ぢやない。眞に大膽なる行爲（一時的の狂憤ではない處の）は、その行爲に對するハツキリした思想を持つて居なければ出て來やしない。それには、何によりも先づ、社會進化の波に注視しなければならぬ。社會形態の根拠を爲す處の、經濟組織の趨移を知らなくてはならぬ。そして、資本主義制度を維持しようとするものの陣營（意識的、無意識的）を知り、その戰法と軍勢の消長を絕えず注視せなければならぬ。味方の陣營は、更に〳〵知らなければならぬ。

『勞働者に、難かしい理窟はダメだ』といふ。さうだ。『難かしい理窟』はダメだ。しかし『ハツキリした革命思想』は摑まなければ、それこそダメである。命懸けの運動ぢやないか。命懸けでハツキリとした思想を摑め！　思想は大切である。思想に臆病であつてはならないから、尙更ら思想を摑むことに臆病、怠惰、卑怯であつてはならない。

だが、――頭でつかちの福助野郎の眞似なんかするな。福助では脚元が危ない。大地を確かり踏みしめて進めない。

他から取り入れて行く思想は、一々經驗に照し、實地に試めして行つて、自分の血肉の中へ巡ぐらさねばダメだ。頭をゴミ溜めにしちやいけない。

カフエー革命家や、乞食革命家などが、時に、拜借して來て振り廻す議論の中に、眞面目なアナキストの一派の人の『勞働組合無能論』がある。これは眞剣な議論である。ヨタ者の出鱈目ぢやない。しかし、僕はこの議論には大反對である。大不服である。僕は勞働組合こそ階級鬪爭の機關として、勞働者教育機關として、新らしき社會への建設的土臺として、最も有意義、有力なものであると信じてゐる。

猶ほ、『組合萬能論者の迷妄』をも是非書きたい。時日があつたら、『經濟運動と政治運動』の問題も述べて見たい。勿論、ほんの骨すぢだけだ。

◇

【堺爲子宛・八月二十八日】

「龜戸の藤」、「日比谷の杜鵑花」の繪葉書二枚、確かに頂きました。厚く御禮申上げます。十日

出のが二十四日に屆きました。何の文章もない繪葉書が、隨分ながく迷子になつてゐたものです。何處かに文字があるかも知れんといふので、蚤取り眼で探してゐた爲めに遲くなつたのでせう、多分。

二百十日も近づいたといふのに、まだ可なり暑いですな。その癖、油蟬が法師蟬となり、蜩も朝夕鳴くんですが。

飯入る丶穴で即ち夕涼み

といふ體たらくです。しかし、體は、至極丈夫。御安心下さい。

◇

【山下儀平次宛・八月二十八日】

十七日附のお手紙、有難く拜見しました。其後益々元氣の樣子、嬉しく思ひます。

岡山では、あの翌日「研究會」の會合所へ國粹會員に踏み込まれて、隨分口惜しい目に合ひました。も少しで痛精玉を破裂させて奴等へ飛び掛つて行くとこでしたが、「こんな奴と命を代へてはならない……」と、ぢつと自制して歸京しました。僕の頭に福田の事がなかつたら、あの時、僕はきつと大怪我をするか岡山監獄へ入るかしてゐただらうと思ひます。

日本の農村運動も、大分面白くなつて來たやうですな。然し、『新社會に於ける經濟組織』と、『新社會へ入るべき過渡時代に取るべき態度』とに就いては、まだ〳〵眞つ暗です。ロシアのボルシエヴィキと農村との悲慘な戰ひを回想するとき、我々は農村に對する「思想宣傳」が行き屆いてゐると否とは、隨分大きな問題を後に齎らすものだと思ひます。工業勞働組合と農村組合とは、いまのうちから、完全に手を握り合つて進み、共々に理解を深めて行かなければならないと信じます。これ等の點を大いに奮勵して欲しいと思ひます。

僕の體は非常に丈夫です。その點は御安心下さい。判決は九月十日です。

◇

【岩佐作太郎宛・九月一日】

死刑にならなかつたつて、自殺はしない。その點は安心して欲しい。又、自ら死を早めるやう樣な體の持ちあつかひも決してしない。生きられるだけは生きるつもりだ。これ又、充分安心してゐてくれ給へ。ただ、僕の體はそんなに長生きの出來さうな體ぢやないと思はれるのと、よし、生きて居られても、さぞ拔け殼のやうな薄馬鹿になつてしまふことだらうと、苦笑されるんだ。だからといつて、悲觀してゐるんでは毛頭ない。眞面目に、最左端へのAへの可能を信ずると同時に、最右端Zへの可能も信ずるといふだけのことだ。事實を事實として、飽くまでハッキリ認めたいのだ。最も好ましい方へばかり宗教的にすがりついて居られない人間なんだ。僕は。

「この仕事は必ず成功する……」と信じきらなければ、全身的にやれない人はあらう。然し「これは八分通りまでは失敗だ……」と充分知つて、猶且つそれに向つて全身的に突進出來る人間もある。この後者は、自ら「八分通りは失敗だ……」と言つてゐたつて、それは謂ゆる「悲觀的言葉」ぢやない。その悲觀的なものをハッキリ認める事によつて、決して意志はにぶりはしない。やはり全身的に闘ふのだ。……僕は徒らに死を選ぶ樣なことはしないよ。安心してくれ給へ。

僕が法廷で「死刑を望む」といつたのは、素より自暴や自棄ではない。又、負惜しみや、偉らがりなんぞでも決してない。「後事……」には消極的方面ばかしを並べたが、僕は死刑に就いては、もつと積極的方面の理由も充分もつてゐるのだ。

僕は、僕の死刑の社會的効果を、かなり強く見てゐる。死刑が、僕を生かしてくれる（繰り返して言ふが實名的虛榮ぢやない）ことを、僕は信じてゐる。

また、僕は自分の力を餘り買被りたくないと思つてゐる。從つて「自分の爲し得る量」といふやうな事も始終考へさせられる。

これ等の事に就いては、祕谷辯護士に下げた參考書の中に、多少自分の考へを述べておいたから見てくれ給へ——。

◇

【中村しげ子宛・九月一日】

今日は九月一日で、二百十日で、地震火事大虐殺の二周年記念日で、「哀可笑數恨空彈」の一幕喜劇が演じられた一周年記念日である。何か感慨無量な感想文でも書けさうなものだと思ひ萬年筆を持つて見たが、さて一向に何の感慨も浮んで來ない。『ハテ俺の頭も空蟬になつてしまつたのかな……コラ、今日はお前の一生の中に於ける最も深刻な思ひ出の湧くべき日ぢやないか。おい、どうしたッ』と、自ら罵つて見たり、頭を引つ叩いて見ても、『ウン、そりや分かつてるよ』といふ樣な、張合のない應えがあるばかりだ。……で、そんな感慨はおやめとする。

二百十日だといふので少々風はあるやうだが、しかし、晴れ渡つた綺麗な空だ。屋根の上で胸突き出してそり返つてゐる天文學者然たる鳩も、「やあ。ひどい風はないわい。地震もないわい」といつた樣な落着きを見せてゐる。二三日前の暑い日には、九十二度もあつたつてねえ。僕の監房なんか、それぢや百度以上だつたに違ひない。外を見ると風はあるんだが、窓があつたつて他へ風が拔け通らないから、窓の外を素通りだ。まるで貧民救濟法見たいな窓だよ。

夕べ、蟲の聲に交つて、遙かに角力の太鼓らしい音が聞えた。何處かに夜角力でもあつたと見える。月は見えなかつた。宵に、星が一つ見えてゐた。

◇

【古河三樹松宛・九月二日】

少し理窟ぽいものを書かうと思つてゐたが、午前に入浴をやつて、浴槽に泛んでゐた鳩の羽

根で一句ひねつたりした加減か、何だか理窟ぽいものなんか嫌やになつちやつた。やつぱり與太を書かう……桐一葉を尻目にかけながら――。

先達の手紙にあつた高畠（素之）の『これはとんでもない誤報で、こんな事をいはれたんでは、第一、死んだ村木君の靈魂も浮ばれまい』はいゝな。殊に『しかし運根では話のしようもなく……』は傑作だ。大化會へ近づいてから得た新知識「れんこん」の通ぶりを見せたいところなんざ可愛い男さ。そんないゝ文句を振り廻す場合に、「時代さくこ」なんぞ考へてゐられまいからな。――「れんこんぢや……」か。フフ、、、近頃、君（高畠）は、モーゼルの三號を持つてゐるさうだな。ウン、よし、よし。

高畠は又『ピストルは其後どこやらの警察でお買上げになつたといふ噂……』と書いたさうだな。フフ、、、それは、村木が高畠にピストルを突きつけた直ぐ翌朝だつてね。高畠も「……嘘だ」なんて、自分の德をつつましく隱したりしないで『俺が親切で買上げるやうに警視廳へ言つてやつたのだ』とはつきりいへばいゝに。村木は思はぬ金が入つて、ホク〳〵と高畠君の德を有難がつてゐたんだから。

バカ松キヤツマロ（赤松克麿）の「科學的新日本主義」もいゝな。高畠先生、鼻が高いだらう。

――まあ暑い内にブツ〳〵ぬかしてろ、泥溝の泡助奴!!

實質の伴はない職業紹介所建設とは、直譯的勞働組合主義者もなか〳〵忙しいや。組合は貧乏だらうから、やつぱりフランスの樣に政府の御援助を先づ御願ひするんだらうな。一層どうだい、マクドナルドが軍艦を造つて失業者を救はうとしたやうに、鐵工の組合は先づ支那征服を唱えて、軍艦大砲等を造らせ、印刷工組合は、過激思想ボクメツの急務を叫んで、その爲めの宣傳新聞、雜誌、本を政府に作らせ、其他さういふ方法で失業の緩和を計つちやどうだい。政府も喜ぶだらうにナ。紹介所よりは確かに近道だぜ。ね、君。

◇

【中村しげ子宛・九月三日】

僕は西洋音樂は全然知らないけれども、でも、聞いて愉快に感ずるものもある。その音樂が何を意味するものだか、どの律調に藝術味があるんだかは、少しも分らないが、聞いてゐて、とにかく心持がすがすがしくなる、といふ程度でなら、僕だつて分るものはある。水の流、波の音をちつと聞き澄す時の心持……要するにそれだらうぢやないか。ただ僕は、餘りに技巧の勝つたものより、極く單調なものが好きなんだ。そこに僕の日本趣味があるんだ。

僕は、サンヂカリズムとアナキズムとが、別れ別れになつてしまへば、兩方にとつて惡い結果を及ぼすだらうと思ふ。サンヂカリズムを無視するアナキズムは、結局、遊軍でしかなくなるだらう。そして絕えずアナキズムからのいゝ影響を受けない、組合一點ばりのサンヂカリズムは、結局ボルと野合するに至るだらう。或は、革命的サンヂカリズムではなく、黃色サンヂカリズムに墮するだらう。組合運動に、眞の理解のない（溫い理解といつてもいゝ）アナキズムは僕は贊成出來ない。

我輩の名川柳「姫御前のあられもなくて腹下し」を何處か昔の本で見たつて……フウン、それは怪しからぬ奴があるものだナ。その昔の人は、きつと僕の名句を盜んだにきまつてゐる。油斷もすきも、なりはしないや。

◇

【橘あやめ宛・九月四日】

其後お變りもありませんか。遠くアメリカから私共の事を御心配下さる御言傳ては、いつも近藤君から有難く聞いて居ります。僕の求刑を知つて大いに驚かれた由、こんなことは米國ぢや見られないでせうが、之れが日本の國の正體なんです。

僕は、死刑は素より覺悟の上です。九月十日にどんな判決があつても、決してお歎げき下さいますな。又、もし無期か長期かにでもなつた場合は、至極のんきに生きられるだけは生きてゐるつもりです。元來が極く氣樂に、のんきに出來上つてゐる人間なんですから、其の邊は御安心下さい。

村木はあの體ですから、捕つたら駄目だとは思つてゐましたが、それにしても、せめて法廷にだけは起たしてやりたかつたです。が、何んとも仕方ありませんでした。しかし、村木は村木らしく死にました。僕が思はず枕頭に涙を流したのを見て、彼は『泣いたつて……しようが……あ、あ、あるかッ』と切れ切れな言葉で僕を叱りました。そして、既に意識を失つた死體同然の體を、タンカに乘せられて監獄を出て行きました。それは一月半ばの風の激しい、寒い闇の夜でした。

宗ちやん達を灰にして、皆んなで淀橋の家から駒込片町へ引取つて間もなくでした。伊勢の津で田中勇之進といふ人が甘粕の弟をやり損つて捕つたとある新聞記事を前にして、『田中つて、どういふ人だらう?』と皆んなで話し合つた事がありましたねえ。その時僕が『ソン見てゐろ、いまにもつともつと、いろんな事が起るんだッ』と獨り言の樣に云つたのを貴女は覺えてゐますか。きつと覺えてゐられるでせう。あの時貴女は、心配さうな不安な顏付きで、ぢつと僕達を見つめてゐられた樣でしたから。其後貴女は、何にかにつけて私達に『決して無茶はしないやうに……無茶はして下さいますな』と、よく言はれました。大化會の奴が下鳥繁蔵といふ馬鹿（今、この監獄へ來てゐます）を使つて大杉等の遺骨を奪つた時も、くれぐれも私達をいましめて下さいました。また、アメリカへ歸らゝ時にも、その事を貴女がくり返し言はれたと村木から聞きました。

私達は、さういつて下さる貴女の心持ちはよく分つてゐました。そして、私達に對する貴女

のやさしい思ひやりを、しみじみ嬉しく感じて居りました。しかし、あんな暴虐に對して、又それをお芝居裁判で誤魔化してしまつた軍閥の奴共に對して、どうして我々が默つて泣き寝入りになつてしまふことが出來ませう。どうして復讐をせずに居られませう。——しかも奴等に對する恨みは、單に大杉等三人の爲めのみぢやありません、他に恨み重なる澤山な理由があるのです。

淀橋の家で、三人の遺骨を祭壇にのせて、ささやかな手向けの花などを立ててゐた時、貴女は柴田さんに連れられて入つて居らつしやいました。其處に居た服部（濱次）夫妻と安成（二郎）の細君と僕とは、ハッと胸を打たれて面を伏せました。吾々は貴女の顏を見るに堪えなかつたのです。

と、貴女は入つて來るなり庭から『宗坊はゐますかッ、宗坊はゐますかッ』と叫ばれました。僕達がそれにどう答へることが出來ましよう……女達はすぐ『わつ』と聲をあげました。それを聞いた貴女は『ちやア、あれは眞當なんですかッ……眞當なんですね……宗……』と言ひさして樣先きへ崩折れてしまはれました。其處へ、二階から村木が降りて來ました。勇さんも降りて來られました。そして、『兎に角まあ……』と言つて、泣き入る貴女を二人で二階へ連れて行きました。僕は下に、ぢつと遺骨の傍で俯向いてゐました。そして、悲痛な賜をかきむしる樣な貴女の泣き聲を聞きながら、ガリ〳〵と齒を嚙んでゐました。

やがて一時間ほど經つて、貴女は二階から下りて來られました。僕はやはり何も言ふ事が出來ず、ただ心の中で『とんだ飛ばつちりで、申譯けがありません』と詫びながら、そつと目禮をしました。貴女は三人の遺骨の前へ行つて燒香をなさいました。そして、其處に祭つてあつた三人の寫眞を見つめてゐるうちに、再び『わつ』と泣き伏してしまはれました。無理のない事です。が、僕達は病中の貴女の證をどんなに氣遣つたか分りません。

貴女はまた、勇さん（大杉）や女の人達に連れられて、二階へ行かれました。僕はやはりぢつとして其の場に殘つてゐました。傍には、服部の細君ときよ子さんが居ました。と其處へ、こんどは魔子ちゃんがエマちゃんと連れだつて、ニコニコ笑ひながら入つて來ました。その後とからは、まだ足つきの危ないルイちやんが、これもキャッキャッと嬉しさうに笑ひながら、よち〳〵とついて來ました。

マコちゃんとエマちゃんは、そうと遺骨の前に行き、びつたり並んでお線香を上げました。そして、二人で顏を見合せて惡戲さうに笑み交しては、合掌禮拜するのでした。それを見たルイちゃんがまた、後ろでキャッキャッと喜びながら、四ツ這ひになつてお尻を突つ立て、頭でコッ〳〵と疊を叩くのでした。服部の親子は、もうさつきから子供達のすることを眺めて、泣いてゐました。エマちゃんを探しに來た九州の伯母さんと、ルイちゃんを探しに來た女中のお雪さんとは、襖の處へ突つたつたまゝ、子供達を指さして泣き出しました。

僕も堪らなくなつて、玄關から前庭へ走つて出ました。其處には葉鷄頭が、秋の日を充分に受けて眞つ紅に燃えてゐました。僕はその眞紅な血のやうな葉鷄頭をぢつと見つめました。僕の眼からは泪は落ちませんでした。しかし、その葉鷄頭の血の色からは、しばらく眼を離す事が出來ませんでした。

僕は今、こんな事を書いて、また貴女に新らたな泪を流させる事でせう……御許し下さい。僕は貴女を思ふ時に、いつもあの時の光景が眼に浮んで來るのです。

御病氣をどうか大切にして下さい。貴女への御手紙は、これが書き初めで、恐らくは又、書き終りでしよう。

宗坊のお父さんはお會ひした事はありませんが、よろしく御傳へ下さい。さらば……

◇

【勞働運動社宛・九月五日】

江渡（狄嶺）君の、『土と心とを耕しつつ』の中に、

『宗教は一種のデカタンであると、カノヴイッチはその著「美への意志」で言つてゐる。この書は暗示深い面白い本だ。反抗とデカタン、それは抑壓せられた人間の自然の双生兒だ』

といふのがある。『反抗とデカタン……』は誰れもがいふ言葉で、別に新しい言葉ぢやない。が、『宗教は一種のデカタンである』といふのは、僕には一寸面白く思はれた。敢て、K介（川口慶助）君に、この語を示す。

◇

【山崎今朝彌宛・九月十日】

今朝は特別自動車で七時前に裁判所へ行き、公判が終ると直ぐ特別自動車で歸つて來た。沿道の辻々に立つてゐる、見知り顏の髯面ラ共を、ぢつと……御挨拶申上げながら——。

いつだつたか『死刑になつたら辭世を、無期だつたらお別れの句を、有期だつたらお祝ひの句を、書いて送る』つて言つたナ。いよ〳〵お別れの句が當選しやがつた。……待つてくれ、いま考へるから……

秋雨を餞けらるる別れかな

歸りの自動車の窓から、これが

見納めと東京の街を眺めつつ

見納めの街は秋雨畫灯

裁判中は……ぢやない、知合中はだ……どうも種々と御世話になつた。厚くお禮を申上げる。先づ面白いのは堅坊の時代だらうな。山崎第二世によろしく。

◇

【近藤憲二宛・九月十日】

今日、法廷へ入つたら、諸君の顔は僅かしか見えず、勞運社連は一人も見えなかつた。服部（濱次）君が、ニヨツキリ起ち上つたので『少ないぢやないか。皆んなはどうしたッ』て訊ねたら、『檢束だッ』と叫んだ。僕は餘りの馬鹿々々しさに思はずプッと吹き出した。

判決は、要するに、要するに、といふ譯けだ。僕としては、一等嫌やな奴だが、まア、笑つて受取ろうよ。斯うなりや、淨土坊主ぢやないが、後はすつかり、『あなた』まかせだ。……他の『あなた』は勿論『佛さま』ぢやない。『社會進化』だ。生きてるぞッ。死ぬ迄は……。

古田君が法廷で、判事がグヅグヅ判決文を讀んでゐる時に、與へられた紙とエンピツとで、判事の顔を寫生してゐた。僕は、コリヤァ面白い、書き上つたら僕が一つ讃をしてやらう——と思つてゐる中に、古田君は、クシャ〳〵とそれを消して了つた。殘念なことをしたよ、折角の記念品を……呵々。

歸りの自動車の中で。

古『これが、世の中の見納めだナ……』

僕『ウン……、別に世の中が變つても見えないナ』

古『さうだ、同んなじ事だねえ。』

二人『ハハハハハハハハ』

◇

【江口渙宛・九月十一日】

いよいよお別れとなつた。

この度の事はいふに及ばず、那須に於いて、其他に於いて、一方ならぬ御世話になつた事を、此處に改めて、厚く御禮を云ふ。

同志諸君は控訴しろと切りに勸めてはくれるが、僕はそんな事はせずに、此ままじりじりの死刑へと旅立つ考へである。若し僕の貧弱な體が、「じりじりの死刑」に長らく持ち耐へて、新らしき社會への第一歩と共に、よろよろと地獄の底から飛出す事が出來れば、此處もとのおなぐさみ……よろしく御喝采を……といふ譯けである。

村木既に病死し、古田君今將に縊られんとしてゐる。そして僕は生き殘つて、死に通ずる一本の闇路を猶ほ何ヶ年間か歩み續けようとしてゐる……命さへあれば、トンネルの頭の上の土が急に崩れて、再び地上へ出られる時が來るといふ考へに浸りながら……。

しかし、此の同じ地下の歩みを歩みつゝあるものは、僕等囚徒のみではない。多少の色合の差こそあれ、多くの勞働者の生活は、やはり此の歩みに外ならない。が、彼等には、自らの力によつて頭上の地に穴を明ける喜びがある。戰ひのよろこびがある。しかし、僕はただ、上から穴をあけてくれるのを待つばかりだ。自らには何んの力もない。鬪ひの喜びがない。殘された、そして、僕のなさねばならぬ唯一の鬪ひは、病ひと衰弱とに對する（肉體的及び精神的の）身、自らの體内の鬪ひのみである。

僕の、今後の「鬪爭」はこれだ。僕は、この鬪ひを鬪ひつつ、生きてゐやう——。

昨日、加藤一夫君が面會に來てくれての話しに、近く「やまと新聞」へ長篇を載せらるる由慶賀〳〵。創作方面にも、大いに沈默を破つて乘り出して欲しい。

加藤君にも賴んで置いたが、鐵君の詩集は一つ大盡力を願ふ。（大不景氣とは聞いてゐるが）どうも、あれは僕の責任が殘つて居る樣に思へて仕方がないので、宜敷お願ひする。

來る十八九日頃に囚衣を着る。監獄は、たぶん、千葉か小菅だらうとの事である。では左樣なら……皆さん御壯健で……。

◇

【堺利彦宛・九月十一日】

いよ〳〵僕の一等嫌やだと思つてゐた「無期」に決定しました。が、控訴はしません。社の連中はしきりに控訴をすゝめてくれるし、山崎辯護士は『君の意志はどうあらうとも、僕は辯護士として控訴する』と言つてくれる。社の連中の氣持は嬉しく受け、伯爵の法律に對する確信は大いに尊敬するのでありますが、僕としては裁判に少しも氣乘りがなく、且つ皆んなにだら〳〵といつまでも御世話を受くるのも心苦しく思ふのです。殊に古田君は控訴しますまいから、古田君が自分の直ぐ傍で縊らるゝのを知りながら、自分は控訴してそれを見てゐるに堪えないんですよ。氣持がね……。

それに、最初あれほど嫌やだつた無期が——尤も今だつて嫌やに違ひないが——此頃では『十五年、二十年といふ刑と無期となら大した違ひもあるまい、どうでもいいや』といふづぼらな氣になつてしまつた事です。有期と無期とでは、精神的に（氣持の上にも）大いに相違しようとは思ひますが、しかし、それと同時に、人間の精神といふ奴は、可なりな程度にまで、自分の意志欲望といふものに左右せられるから、そこの處も謂ゆる「氣の持ちやう」といふ奴で多少の加減は出來ようと、ぐうたらな考へをしてゐます。それに「空想」といふ奴も、斯ういふ場合には多少役に立ちますからな——。呵々。

さて、斯うなつて來ると、いつかお約束した「日向ぼつこ會」も少々空想の霞がかかつた樣な感のないでもありませんな。僕の思ふのに、貴君も少なくとも今後「十五年間」は生きてゐて下さらないといけませんよ。僕も今から「十五年間」は、何んとかして、衰弱と病氣とに（肉體的にも精神的にも）苦鬪しながら一生懸命生きてゐようと思つてます。『日向ぼつこ會』といふすばらしい理想のために……。

それでもまだ敵の社會が續いてゐるなら、先づ其の邊で生きてゐる事を失敬したいと思ひま

すよ。尤もそこまで命が持ち堪えたら『なアにもう一二年、もう一二年』なんてな事にきつとなるんでせうが……僕の樣な凡人は。呵々。

赤になつたら、またぼつ〳〵英語と數學とをやりたいと思つてゐます。英語と數學が、一歩一歩進んで行けば、そこに自分の『生きて行く』といふ氣持が、よりよく自覺されようと思つてね。

それに、新しい社會には、統計が……從つて數學が……最も大切だと思ふから、僕の數學が實を結んで、しかもそれがその時の役に立つ……てな、殊勝氣な夢もあつてね。ハツハツハツ。まアどうかして麥飯で英數を釣り上げたいものです。

昨日の公判で、山崎辯護士は『判決を受けた直後の感想』を書いてくれと云つて、僕等に紙と鉛筆を渡しました。で、僕は、判事が判決文の前段をくだくだしく讀み上げてゐるうちに、秋雨の音をきゝながら獨り句作に耽つてゐました。そして、言渡しの濟んだ時には、確か三句ほど書きつけてゐました。今は忘れてしまつて思ひ出せません、その句を。

秋雨を餞けらるる別れかな

これは、その日歸つてから作つた句です。歸りの自動車の中では、

見納めの街は秋雨晝灯

と獃句りました。下るまでには、まだ〳〵メイ句が吐けさうです。

控訴期間は十七日までださうですから、十八日か十九日には下ります。小菅か、千葉か、甲府のうちだらうといふ事です。

爲子夫人にも、眞柄さんにも、別信は出しません。いろ〳〵有難うございました。厚く御禮申上げます。

◇

【奥山伸宛・九月十四日】

謹啓、時下殘暑猶去難しと雖も月明既に秋冷を湛え蟲聲滋々として鐵窓に入るの好期と相成申候處、尊臺益々御清適奉大賀候。

野生裁判の結果は去十日無期と決定、兩三日中には終身囚として何處かの獄に送らるゝ運命と相成候。

今日迄、小生の先生に受けたる恩義の深さ身に泌みて忘れ難く、思ひ出づる毎に感涙の停まざるもの有之候。即ち永別にのぞみ此情を述べ一片以て御挨拶申上候。早々敬白。

◇

【勞働運動社宛・九月十四日】

岩佐君

では……。

大奮闘の由、大いに嬉しい。是非、百姓運動專門の、いゝ青年を見出してくれ。このかんらんの人が少ない。君の力に待つこと大なり、だ。

千葉からの手紙は嬉しかつた。十八の意氣で生きてゐるから安心してくれ。

和田榮太郎君

いよ〳〵最後のお別れとなつた。約束のものは、濟まないが書けなかつた。許してくれ。たぶん、四五日のうちには何處かへ送られる事になるだらう。

今日は、氣持ちのいゝ秋晴だ。囚人にとつて、空ほど綺麗なものはない。

俺は生きてゐるよ。麥飯で健康を釣つて見るつもりだ。君は、急がず、がつしりと大地を歩んで進んでくれ。健闘を祈つてゐる。

近日、「筆記もの」を藤間へ宅下げする中に君宛のものも一綴ぢある。本からの拔き書に過ぎないが、何かの役に立てば幸甚だ。ぢや、さよなら。

古河三樹松君

さよなら、古河君。どうかあせらずに、落ちついて、根强く、しつかりと運動してくれ。日本人の性格で、一等缺乏してゐるのは根强さだ。僕は自ら顧みて、其の點を常に耻かしく感じてゐる。これは、君に對して根强さが不足だといふのではない。吾々には常に根强さが不足だといふことを言ひたいのだ。

お氣嫌よう。

川口慶助君

いよ〳〵お別れが來た。

僕は君が、君の性格に最も適する運動方法を摑んで、一路を進んだなら……と思ふ。

燕去り、雁來り、蟲地中に入り、久太赤煉瓦の底に餘生を投ず、か。

秋天高く、一片の浮雲なし、豁ッ、豁ッ、喝ッ——。

◇

【望月家宛・九月十四日】

望月桂君

いよ〳〵お別れとはなりにけりだ。お互ひに、御坐なりを言ひ合つてもしかたがないし、言ふべき事は、訊くべき事は、大底お互ひの腹の中で分りすぎる程分つてゐるんだ。さう思ふと何んにも書くべきことはない。君には、僕が死んでから後の事まで頼んであるんだから……。

ただ、いろ〳〵御世話になつた事、今後も猶ほ御世話にならなければならない事に就いて、

衷心からの御禮を言つて置きたい。

僕は、あの事件後は一切誰れにも會はれまいと思つてゐたのだ。それが一年近くもの間、面會に手紙に、其他着るものから身の廻り一切のものにまで、望月家の手厚い世話をして貰つたのだ。全く嬉しかつたよ。近日も一度會ひに來てくれるさうだナ。この間の時は我儘を言つて濟まなかつた。許してくれ。

此の上はウンと馬鹿になつて、生きられるだけは生きてゐるつもりだ。君もます〳〵元げて、ます〳〵ニコ〳〵してゐてくれ。

望月福子樣

福子さん、とう〳〵お別れがやつて來ました。お禮を言はねばならぬ事が餘りに澤山ありますが、ただ「有難う……」でまけておいて下さい。

此の上は、僕も生きてゐられるだけは、馬鹿になつて、氣樂に生きてゐますよ。貴女もどうか、いろんな雜事をしながら、好きな歌でも靜かに唱つて、愉快に暮らしてゐて下さい。僕に命さへあつたら、きつと再びお會ひの出來るときが來ると僕は信じてゐます。お爺さんお婆さんになつて、一緒に又、何處かへ見物にでも行くやうな時がある樣な氣がしますね。ハハハ、、、。まア、そんな事でも空想しながら、ニコ〳〵生きてゐますから、安心して下さい。

『國文の解釋』を郵送しましたが着きましたか。くだらない本ですけれど、僕が監獄の中で買つた本だから、記念のために差上げます。又、僕の歌と句との手控や、いろんな人の詩歌俳句のぬき書きなども宅下げしましたから、近藤君から貰つて下さい。貧弱な形見です。

望月君に僕の引受人になつて貰ふことにしましたから、二ヶ月目に一度づつ手紙で消息を告げ合ふことの出來る樣になつたのを嬉しく思ひます。せい〳〵皆んなで、僕の命の藥になる樣な音信を下さい。呵々。

今日は氣持の好い秋晴れです。鳩が舞ひ、蜻蛉が飛んでゐます、あまり、くさ〳〵と物事を考へ過ごさず、體を大切に願ひます。では、さよなら……

キミチヤン

イツモ、メンカイニキテクレテ、アリガトウ。サイバンニモ、キテクレテ、アリガトウ。カワイイ、ニコニコシタカホヲミセテクレテ、アリガトウ。キユウオヂサンハ、モウキミチヤンニアワレナイトコロヘ、イツテシマイマス。ケレド、モシ、キユウオヂサンノコトガ、シリタイトオモツタトキニハ、キミチヤントコノオニハヘクル、チヨウチヨウヤ、スズメニキイテゴラン。キツト、オシエテクレルカラ。ケレド、ドウシテ、ソンナトコロヘイツタノカハ、オシエテクレナイヨ。ソレハ、キミチヤンガ、オホキク、オホキク、ナツタラ、ヒトリデニワカリマス。マコチヤンガスグカヘツテシマツテ、キミチヤンモ、サミシイダロウ。サヨウナラ。キツクト キツス。

キユウ

◇

【伊串英治宛・九月十五日】

いよ〳〵お別れだ。控訴をせずに直ぐ下がる。君は『何故に控訴しないか？』と聞き返す程の野暮天ではないと考へるから、敢へて說明はしない。

此の上は、ただ止むを得ざる横着を極め込んで、萬事『あなた樣』に身をお任せするより仕方がない。だが、僕の信ずる『あなた樣』は、天にます『あなた樣』や、西方淨土の『あなた樣』であらう筈がない。それは今將に最も意義ある歷史的飛躍を爲さんと爲しつつある『勞働階級の力』である。

今年も秋になつた。天高く、勞働者瘦するの候である。が、僕は入獄以前よりも却つて肥え太り、丈夫になつてゐる。さて、どれだけ生きられるか……。まさか一年や二年でへたばりもすまい。安心してくれ。

空は晴れ渡つてゐる。秋の氣は澄み渡つてゐる。百舌鳥がなく、桐の一葉が落ちる……古田君はいま何を考へてゐるだらう……

奮鬪を望み、健康を祈る。慾の深い注文だねえ、ハッハ……さらば！

◇

【藤田浪人宛・九月十六日】

いよ〳〵お別れとなつた。

控訴して死刑にしろと云つて見たところで、始まらない。男らしく、笑つて言ひ値通りに買つてやる事にした。假りに控訴して、辯護士諸君の御骨折で、却つて二十年、十五年の有期になつたところで、大した相違もなからう。十五年も辛棒してゐる間には、世の中も少しは目鼻が付いて來やうぢやないか。

耳元へ寄せてくる波の音をぢつと待ちつつ、生きられる丈けは生きて居るつもりだ。體は娑婆に居た時よりも丈夫だから安心してくれ給へ。考へて見れば、これも一種の逃避だねえ、結果に於いて——呵々。

未決中に受けた御親切、あつく御禮を言ふ——さらばだ。

健康なれ！　奮鬪あれ！

◇

【中村しげ子宛・九月十七日】

しげちやん。

待つてゐた君からの手紙が夕べ着いて、嬉しく、繰り返し繰り返し讀んだ、今日は、いよい

よお別れの手紙を書き送る。

さて……と改まつては見るが、一向、改まり榮えのする言葉も浮んで來ない。今までに書き送つた手紙を書く時とおんなじ氣持と消えた。風につれて桐の一葉がばさりつと落ちる——。

——秋の風が、面らを撫でて行く……はて？　……いつもとは少々異つた感じもある。センチメンタルの奴が大分這ひ込んでゐるわい。

萬年筆、その他の一切のものを今日宅下げする。萬年筆はかなり使ひ古るしてゐるから、書き難くなつてゐるよ。そのつもりで……。

體は安心してくれ給へ。何ァに、元氣で生きてゐるよ。命懸けで打つ放すピストルの彈が空つぽだといふことを知らなかつた程の呆け者だ。こんな抜け作は、案外長生きするものさ。

墓つてゐたのが、とう〳〵雨になつてしまつた。軒下で鳩が鳴く。

温い、自由な家庭の味を知らなかつたり、幼なくしてそれを奪はれた者は可哀さうだ。僕は今度マコに會つて、あの淋しさうな姿を見て、益々此の感を深くした。

僕は幼ない時に兩親は非常に愛してくれたに拘らず、家庭の眞の温か味といふものを知るには、家が餘りに貧乏であつた。經濟事情が、知らず〳〵家庭の潤ひを無味にした。從つて僕は、それを知らなかつた。その後に接した家庭がどれもこれも嫌やなものだつたので、美しい温い家庭なんて、現代ではユートピアに過ぎないとさへ思ひ込んでゐた。それが後ちに、君の家庭に接するやうになつてから、僕には初めてそれを味得出來たのだつた。僕がそれをどれほど嬉しく有難く思つてゐるかは、恐らくは君には分るまいと思ふ。今、僕が斯んな事を言ふのは、自分の事を考へるにつけても、神經を働かせる樣なマコの樣子がいた〳〵しく思へてならないからだ。その内には、必ず東京へ來ることになると信ずる。勞運社には女手がない。どうかよろしくお願ひする。望月君にも、福子さんにも。

いろんな事でちよい〳〵呼び出されるので、落ちついて思ふ樣に書けない。日が暮れて來た。これで止す。

では、僕は行く、たぶん二三日中には何處かへ送られるだらう。

雨が、嫌やに降りやがるな——。

さよなら!!　皆さんによろしく。

◇

【近藤憲二宛・九月十八日】

新谷、倉知の二君は檢事控訴の由。

それから、僕の行き先きへ最初に來てくれる時、望月君も、一緒に引つ張つて來てくれ。例の引受人を、若し出來れば、やつぱり二人にして置きたい。僕も行つてから頼むし、外からも二人で來て交渉して見てくれ。どうしても一人ぢやないといけないと言ふなら、君だけにして置いてくれ。そして、手紙をくれる時、望月家からの消息文を同封する樣にしてくれ。うまく二人になれば、僕からの手紙は交代に兩方へ出す。勿論、望月への手紙も、なるべく『勞運向き』に書くつもりだ。呵々。

今日もまた雨だね。古田君とはまだ會はない。

新聞に、僕が北海道行きを志願してゐると書いたさうだが、とんでもない嘘つぱちだ。誰れが北海道なんか望むものぢやない。馬鹿々々しい。

◇

【望月桂宛・九月十九日】

特別許可を願つて、正札附、最後の手紙を書く。

昨日は古田君と面會した。別に話すべき事のあらう筈がない。馬鹿話をして愉快？に握手して別れた。

今日、これから愈々執行になる。行先きは未だ告げられない。今朝、近藤君と岩佐君とが面會に來てくれた。十一時すぎだと、もう駄目だつたかも知れない。全くいい時だつた。

いい天氣だねえ、今日は。秋の彼岸だからな——。晴れ渡つて一點の雲もないのは、少し色彩が強よすぎる。その澄み渡つた空に、さはやかな白雲が流れてゐる方が、感じがいいと思ふ。花檜の枝で、雀が糞をたれた——秋日和。

體量は十二貫八百あつた。ここへ來た時には十二貫七百五十だつたのだから五十匁增した譯だ。胸隔は十三あつた。これも少々脹つたのぢやないかと思ふ。のんきものに、こんなものだ。驚いたか。呵々。